

イソップ東漸—ロバート・トームと
『意拾喩言』

内 田 慶 市

イソップ東漸—ロバート・トームと 『意拾喩言』

内 田 慶 市

は じ め に

いわゆる近代中国の「西学東漸」は、明万曆十一年（1583年）に来華したマテオリッチ（Matteo Ricci, 中国名を利瑪竇, 1552—1610）に始まるとされる。この「西学東漸」の主要な担い手であった宣教師達は中国にキリスト教とヨーロッパの近代科学をもたらしたが、実はその中に「イソップ」も含まれていた。彼らは「聖書」と「イソップ」を携えて中国にやってきたのである。

1983は H. Bernard の『Le Père Mathieu Ricci et la société de son temps（利瑪竇神父傳）』（1937）を援用して次のように述べている。

当時のイエズス会士たちは東方に布教にやってくる際には、みな「イソップ寓話」を携えており、しばしばその中の寓話を引用して、モラルを説いたのである。斐化行（Bernard, R. P. Henri—筆者）の『利瑪竇傳』には「ある一人の役人がイエスの事跡を述べた小冊子に見入っているのを見て、私は、これは我々の教えに使うものだから差し上げられないと言い、代わりに一冊のイソップを贈った」とある。（230p）

このことは、遅れてやって来たプロテスタント宣教師においても同じことが言えるようである。たとえば、『Chinese Repository』（Vol. VII No. 8, Dec. 1838）には次のような記述が見られる。

Another kind of publication, very acceptable to the Chinese, is the short tale, covering a moral lesson, or reflection, such as the excellent fables of Aesop.

(中国人に受容されうるその他の出版物は、教訓や思想を含んだ、たとえばイソップの優れた寓話のような短い物語である)

イソップの中国語訳は現在までこれもリッチの『畸人十篇』(1608)に採られた教編が最初のもの¹⁾と認められ、まとまったものとしてはトリゴー(金尼閣)の『況義』(1625)が知られている²⁾が、中国語訳イソップの流れの中で、その中国語の質、量、普及の度合い、またその中国語学研究史上における価値等々どれをとってみても他を圧倒しているのがトームの『意拾諭言』である。本稿ではトームの『意拾諭言』とその周辺の問題について論じてみたい。

1. ロバート・トームその人

『意拾諭言』は、1840年に「The Canton Press Office」³⁾から出版されたもので、その扉には「意拾諭言 ESOP'S FABLE WRITTEN IN CHINESE BY THE LEARNED MUN MOOY SEEN-SHANG, AND COMPILED IN THEIR PRESENT FORM (with a free and a literal translation) BY HIS PUPIL, SLOTH.」とある。

(「博学なる蒙昧先生によって中国語に訳され、そのものぐさな生徒によって意訳と直訳付きの現在の形に編集された意拾諭言」)

四つ折り判の大きさで、献辞(1p)、Errata(1p)、英文のPreface(3p)、英文のIntroduction(19p)、Remarks(6p)、英文の目次(2p)の後に、中国語の「叙」と「意拾諭言小引」が3p、さらにReferences and Explanations(1p)、そして本文が104pというのが全体の構成である。

いま「MUN MOOY SEEN-SHANG(蒙昧先生)」はさておき、「HIS PUPIL, SLOTH(そのものぐさな生徒)」という特異な呼び名⁴⁾で自称する編者は英国人ロバート・トーム(Robert Thom)である。

トームの経歴に関しては、Freeman Huntの『The merchants' magazine and commercial review』(No. IV, Vol. XVI, April. 1847, 381p—383p)の「Mercantile Biography—The late Robert Thom, British Consul at Ningpo」に詳しい。これは『Glasgow Chronicle』に掲載されたトームの追悼記事を

引用する形で彼の略伝を述べたものである。また、『支那叢報』第八巻解説(1942)も恐らくはこれを元にしたと思われるが、補足されている部分もあり有益なものである。

いまこれらによって、トームの生涯について概観しておく。

ロバート・トームは1807年8月10日、グラスゴー(Glasgow)で生まれた。商業に志し、少年時代をグラスゴーで1年、リバプールで5年間商店の徒弟として過ごす。その間、文学にも目覚め、複数の新聞への常連の投稿者であった。1828年6月、ベネズエラの首都カラカスに渡り、3年間商業に従事した。そこで彼はスペイン語を完全に習得する一方、カソリックの聖職者との友好的な討論や仕事面での驚くべき才能によってかなりの名士になったという。その後、メキシコに1年半滞在した後、1833年の冬に英国に戻った。1833年の7月、フランスのポルドーに渡り、そこを經由して1834年2月、中国(広東)の地に足を踏み入れた。それから2度と祖国に戻ることはなかったのである。

広東ではジャディン・マセソン商会(Messrs. Jardine, Matheson & Co., 怡和洋行)の商館で活躍した⁵⁾が、中国の言語と文学に精通するため余暇や休息の時間もその学習に充てたという。その結果、広東滞在2年にして、相当流暢な中国語をあやつれるようになっていた。たとえば1837年にモリソン(John Robert Morrison, モリソンの次男)やギュツラフ(Gützlaff)不在の際に、彼らに代わってエリオットを助けて中国側と「官話」によって折衝に当たったということからも、その実力はうかがえる。また当時広東で発行されていた新聞や雑誌に投書や記事を書き続けたという。

アヘン戦争勃発後は英国軍属となって広東、舟山、鎮海、澳門と奔走する。1841年10月から1842年5月までの鎮海での民政管理は彼の数々の経歴の中でも特に高く評価されている。それは中国人によっても賞賛された。Elipoo(両江総督の伊里布)は1842年8月、南京で彼を紹介された時、彼によびかけてこう言ったという。「La-pih-tan (Robert Thom), 私はあなたの鎮海での市民管理に感謝します。そのことであなたは中国では偉大な名声を得ています。」

南京条約および追加条項の締結においても、ギュツラフ、モリソン等と共に

通訳として活躍しその貢献するところは大きであった。

こうした功績、手腕は英国政府の認められるところとなり、1844年5月5日寧波の初代英国領事に任命された⁶⁾。

しかし、すでに病魔がもともと頑丈ではなかった彼の体をひどく蝕んでいた。それ以前から発熱を繰り返していたが容易には回復せず、ついには水腫を併発する。願いによって休職の許可は受け入れられたが、後任の到着までは自分の職場を離れようとはしなかった。そして、その到着を待つ間に、死が彼を追いこした。1846年9月14日、彼は任地で斃れたのである。享年満39歳であった。

トームの『意拾噺言』以外の著作には以下のようなものがある。

- (1) 『王嬌罵百年長恨 Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han or The lasting resentment of Miss Keaon Levan Wang, a Chinese tale:founded on fact』(The Canton Press Office, 1839)

これも「Sloth」のペンネームで出版された。『今古奇観』や『情史』などにも収められている有名な白話短編小説の英訳であり、豊富な注も付けられている(本文 66p, 挿絵1枚)。その序には「Canton 25th December 1838」とある。なお、本書はその後1846年に Adolf Bottger によってドイツ語にも翻訳されている。

- (2) 『華英通用雑話, 上巻 Chinese and English Vocabulary, Part I』(1843?)

同じく広東で出版された英漢対訳語彙集(会話付き)である。正確な出版年は不明であるが、巻末に著者の英文の識語があり、そこに「Canton 10th August 1843」とある。内容については、詳しくは拙稿1997を参照⁷⁾。なお、本書には付録として後に、何故か墨海書館蔵版『聖經史記』(論若瑟之來歴の論若瑟幼時冤枉一第十四章から論雅哥伯之死一第十八章まで)が付く。齋藤希史氏のご好意によりコピーを頂いたパリ国立図書館蔵も、筆者が現物を見たハーバード大学 Houghton Library 蔵本も同じである。

- (3) 『The Chinese Speaker, Part I (正音撮要, 上巻)』(寧波華花聖經書房, 1846)

その中国語タイトルからもわかるように高静亭による『正音撮要』(1810)の会話部分、『紅樓夢』の第6回、さらに『家寶全集』の「知夫順妻」に音注と英訳を施したものである。本書は中国印刷史研究の面からも実は貴重な資料であり、おそらく本書が中国で正式に「分合活字」⁹⁾が使われた最初のものである。

この他、Bridgman『Chinese chrestomathy in the Canton dialect』(Macao, 1841)⁹⁾の貿易用語に関する第5章、第6章もトームの手にかかるものである。

これらのトームの著作は先の『The merchants' magazine and commercial review』によれば、すべて自費で出版され、個人や団体に無償で配布されたものという。ただし、『The Canton Press』には、しばしば以下のような広告が掲載されており、「無償で配布」というのは信用に欠けるところである。

NOTICE—Just published and for sale at the Canton Press Office.
“The lasting resentment of Miss Keon Levan Wang.” A Chinese tale,
founded on fact; translated from the Original by SLOTH. In one
volume, on foolscap paper, price One Dollar. (No. 233)

FOR SALE—At the Canton Press Office, ESOP'S FABLES, in
Chinese with a free and a literal translation into English, by SLOTH,
price \$2 a Copy. (No. 246)

ところで大英図書館所蔵の『The Chinese Speaker』には貴重な資料が残されている。David Thom による、本書の大英図書館寄贈にあたってのトームの関連文献等を記した私信である。Liverpool 発で日付は1847年11月6日となっているこの文書には、『The Chinese Speaker』が極めて痛ましい環境の下で書かれたこと、その序文は彼の「死の床」から、満39歳の誕生日(1846年8月10日)に書き終えられたこと、1846年9月14日に亡くなった後のことは全て彼の遺言通りに行われたことなどが記されている。また、彼の著作に関する1847年までの「書評」等の所在も詳しく示されており、トームの研究には極めて有用な資料である。これには、トームの「写真」のことも触れられている。

Looking at the Engraving of the Treaty of Nanking (from Platt's picture), Mr. R. Thom's portrait will be observed. He is the only

European who is represented sitting at the Table.

この南京条約の時の写真は一枚しか知らない。1842年8月29日の例のイギリス軍艦コーンウォリス号上での「集合写真」である。それを見ると、確かに真ん中のテーブルの向かって右に一人のヨーロッパ人が座っている。たぶん恐らくはこれがトームなのだ。

なお、トームの著作は全て、この David Thom によって各図書館に寄贈されたものようである。もちろん私がこれまで見ることができたものだけだが、いずれにも「Davis Thom より〜へ」という署名が入っている。

David Thom とトームの関係については、トームの兄の可能性が大である。まだ断定はしかねるが、Allibone『A critical dictionary of English literature and British and American authors』(1891) や Boase『Modern English Biography』(1965) に収められている David Thom がその人であると考えられる。それらによる¹⁰⁾と、1795年前後にグラスゴーに生まれ、リバプールの教会の牧師であったという。トームよりも12歳年上ということになる。実はハーバード大学ホートン図書館 (Houghton Library) の「The Philip Hofer Collection」に収められている『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』には Hofer の手になると思われる書き込みがあり、それには次のように記されているのである。

Robert Thom, Br. Consul at Ningpo is the translator. D. Thom was his father.

しかしながら、David Thom の文書ではトームのことを「brother」¹¹⁾と呼んでおり、父親ならば自分の息子を「brother」とは称さないだろうから、Hofer の書き込みには問題があると思われる。

2. トームの中国語学研究

かれの中国語に関する知識は相当なものであり、貿易商や外交官であると同時に、一方では当時、有数の中国語学者であった¹²⁾。『意拾喩言』の Introduction は文字学、文体論、文法学を簡潔に述べた中国語概論とでもいうべき

ものである。特に、そこでの「官話」の分類などはまさに注目に値する内容である。それはある面では、それ以前のマーシュマン (Marshman) やモリソンをも凌いでいると思われる。また彼の研究はその後の中国語学にも大きな影響を与えている。『意拾喩言』の内容に入る前に、ここでは特に彼の「中国語(その文体)の分類」について述べておく。

トームは、中国語を先ず「文字」(Written Language) と、「言語」(Spoken Chinese) の2つに大別する。

「文字」はまた「寫法」あるいは「手寫」とも表されるが、それは更に次のように分類される。

I. 古文 (ancient literature)

- (1) 經書, (2) 古詩

II. 時文あるいは世文 (modern literature)

- (1) 文章 (fine writing) ……最も優れた「文章」は漢代のもの。また、「文章」は「世文之首 (the very head of Modern Literature)」と呼ばれる。
- (2) 詩賦 (Poetry, Songs, Ballads &c, &c. not ancient) ……最も良い詩は唐代のもの。
- (3) 論契 (Edicts from the Emperors or the Mandarins to the People)
- (4) 書札 (embracing all the different styled of correspondence)
- (5) 傳志 (all History, and Historical Novels of the first order) ……『三國志』や『列國傳』の類。
- (6) 雜録 (which in opposition to the wan chang (called as stated above the very head of Modern Literature) is styled 時文之末 or the dregs-being the easiest and humblest style of composition. Under this head are included all silly novels and trash of stories, —and we must add, that, the humble work now laid before the public-claims no higher classification than as belonging to the dregs of Chinese Literature!) ……『意拾喩言』はまさにこの「雜録」に入ることになる。つまり、「時文之末」であって、「文章」の対極にあるもの。文の最も簡単で粗野なスタイルである。

「言語」(Spoken Chinese) はまた「説法」とか「口説」とも呼ばれるが、大きく「官話」(Mandarin Language) と「郷談」(local dialect) に分けられる。

「官話」は更に2つに分けられる。

- (1) 「北官話」……また「京話」あるいは「京腔」とも呼ばれる。簡単に言えば、北京のことばである。
- (2) 「南官話」……また「正音 (true pronunciation)」あるいは「通行的話 (language of universal circulation)」とも呼ばれる。これが正式な「官話」であり、また南京で話されることばである。

また、「北官話」の言葉を反映したものとして『紅樓夢』『金瓶梅』『正音撮要』『聖諭』をあげるし、「南官話」の特徴として「入声」があり、いわゆる多くの「小説」はこの「南官話」で書かれていると指摘している。

「郷談」については、種類が多すぎて全てを説明するのは不可能とし、康熙字典の「郷談豈但分南北，每郡相隣便不同（郷談は単に南北で異なるだけでなく、隣り合わせの村ですらも同じではない）」という一節を引用して、その複雑さを述べている。ただ、広東語と福建語については少し詳しい説明を加えている。

トームのこのような分類に対して、たとえばモリソンも「官話」には言及するがこれほど詳しくはない。モリソン1815では次のように述べられているだけである。

What is called the Mandarin Dialect, or 官話 Kwan hwa, is spoken generally in 江南 Keang-nan, and 河南 Ho-nan, Provinces, in both of which, the Court once resided; hence the Dialects of those places gained the ascendancy over the other Provincial Dialects, on the common principle of the Court Dialect becoming, among People of education, the standard Dialect. A tartar-Chinese Dialect is now gradually gaining ground, and if the Dynasty continues long, will finally prevail. There is no occasion to suppose it a "Royal Dialect, fabricated on

purpose to distinguish it from the vulgar.” Difference of Dialects arise gradually without art or contrivance!

(『Dictionary of the Chinese language, in three parts』Vol. 1—Part 1, X)

またトームの後の、たとえば Williams は『A syllabic dictionary of the Chinese language』(1874) で次のように述べるが、明らかにトームを踏襲していると思われる。

In this wide area, the Nanking, called 南官話 and 正音 or true pronunciation, is probably the most used, and described as 通行的話, or the speech everywhere understood. The Peking, however, also known as 北官話 or 京話 is now most fashionable and courtly, ……

ところで、このような分類はトームによれば、「我々の師である蒙昧先生による分類」ということであるが、これより先にトームが「不完全である」と批判する M. de Guignes (に依るという) の分類もトームが言うほどには劣っていない。Guignes (1721—1800) といえば、プレマーレ (Prémare) を剽竊したことで悪名高いフルモン (Fourmont) の門下生であり、彼の中国語学に対する見解はおそらくそれらの流れの中にあると考えられる。すなわち、この Introduction の前段は、トーム以前の中国語分類の総まとめと見ることもできる。そこで述べられている、「古文」「文章」「官話」「郷談」の分類のうち、とりわけ「文章」と「官話」に関する記述は見るべきものがある。

たとえば、「文章」と「官話」について次のように説明される。

「文章」は「古文」ほど簡潔ではなく、「より飾られた」もの。この場合「死」「活」「虚」「實」という文字の精妙な区別が必要である。しばしば「時間」や「数」を表す「particle」¹⁹⁾ が用いられる。「文章」はあくまでも「書かれる」もので、「会話」には用いない。

これに対して「官話」は、「文章」よりも冗長であり、話す人間の個性、迫力、明快さを帯びる。「同義語」「前置詞」「副詞」あるいは「particle」が多く用いられる。このことで「官話」は意味が明確、具体的になる。しかし、「官話」は「書面語」ではほとんど用いられず、「会話」にのみ用いられる。従っ

て、中国語における「口語」には2つの方法しかない。「官話」か「郷談」である。「官話」は北京、広東、あるいは他の都市でも通用するが、特に江南地方の人がそれをうまく話す。

これは中国語の文体の特徴をかなりの程度まで言い当てているように思われる。ただし、このような Guignes やトームの分類の中国語学研究史上の正確な位置付けは今後の課題にしておきたい。

いずれにせよ、トームのこのような優れた中国語学の見識を背景にして、漢訳イソップ『意拾喩言』は生まれたと言える。

3. 『意拾喩言』の内容と特徴

本書が作られた目的は、英文 Preface や中国語の「叙」によれば、当時「欧米人が中国語を学ぶため」の適当な入門書がなかった（蓋吾大英及諸外國、欲習漢文者、苦於不得其門而入）ことによる。つまり、あくまでも、欧米人の中国語学習用テキストということであって、これまでの宣教師の立場とは少し違っている。

収められている寓話は全部で82話（各話には番号がふられており、最後は81になっているが、31と60の番号が重複している）で、中央に横書きの中国語（漢字）、左に意識と直訳の英文、右に南京音と広東音の音注が附されている¹⁴⁾。また、漢字は木版で英字は金属活字であるが、このように漢字と英文を同じ紙面に並べて印刷（二度刷り）するのは当時としては初めての試みであったという¹⁵⁾。鈴木広光氏のご教示¹⁶⁾によれば、「中国語概説部分の漢字活字（欧文と混植）は、モリソンの字典などに使われているおなじみの彫刻活字」であるという。

この『意拾喩言』の大きな特徴として、先ず、時間や場所の設定、話の内容、モラルを「極めて中国的」に変えていることがあげられる。

たとえば、「昔々あるところに」といういわば「まくら」の言葉には、次のような中国式の人名や地名、書名が用いられている。（数字は寓話の番号）

盤古初……………(1)

山海經載……………(3)
大禹時……………(6)
神農間……………(7)
羅浮山下蘭若幽樓……………(12)
禹疏九河之時……………(16)
虞舜間……………(24)
峨嵋山下……………(29)
昔大禹治水，泗淮騰湧……………(30)
齊人有一妻一妾……………(39)

16は有名な「兎と亀」の話であるが、「禹が治水の時に、動物達は皆とりあえず避難した。その時に、兎と亀が一緒になった。」と話が始まっていくわけである。

また、「俗云」「諺云」とかで始まるモラルの部分も多くは中国の故事成語の類を利用している。

- 欲加之罪，不患無辭(1)……………左傳
漁人得利(3)……………戰國策
驕兵必敗(16)……………漢書
無君子莫治野人，無野人莫養君子(29)……………孟子

次の例のように、はっきりと「論語に云ふ」とか「孟子に云ふ」と示している場合もある。

論語云，小不忍則亂大謀，其信然矣。(24)

孟子云，矢人惟恐不傷，函人惟恐傷人，又何怪乎。(29)

このほか、「愚夫痴愛（原話は「雌猫とアフロディーテ）」(64)では、「月の神アフロディーテ」は「嫦娥」として登場するし、「車夫求佛」(66)では「力持ちヘラクレス」は「阿彌陀佛」と翻訳されている。「始求北帝」(47)の「ジュピター」は「北帝」¹⁷⁾となる。

まさに、トームによってイソップは「中国の衣装をその身に纏って」¹⁸⁾中国に現れたのである。

『意拾噲言』のもう一つの大きな特徴はその文体にある。

トームは、英文序の中で、このスタイルを「the simple style」と呼び、「文字之末」である「雜録」、あるいは「Lowest and easiest style」に分類されるとした。そして、このスタイルをマスターすれば学習者は全く困難なしに、様々な「小説」類や現在の大衆小説が理解できると考えた¹⁹⁾。

このトームの採用した文体は、後の漢訳聖書の三種の文体（「文理」「淺文理」「国語」）のうちの「淺文理」、あるいは Varo (1703) の言う「第2モード」²⁰⁾に、ほぼ相当するものと考えてよいと思われる。基本的には「文言」であるが、「白話」に限りなく近い「文言」、すなわち「文言白話混交体」である。

「白話」的な要素²¹⁾として考えられる語彙や語法について見ていくと、先ず典型的な白話表現として、次のような「進行、持続の表現」や「完了の表現」が用いられている。

正在忙亂①

穿着外套忙奔而來②

請了，請了③

買了那幾位④

紅漲了臉⑤

また、差得遠⑥といった慣用的な「様態補語」の使用、擡去⑧、伐去⑩、咬去⑪、走出⑫のような「方向補語」や纏住⑬、競不了⑭のような「結果補語」「可能補語」が多用されていることも白話的と言えよう。

這や他、你という白話的な代名詞も以下のように使用されている。

這還了得⑮

這小子⑯

看他如何⑰

你我同事⑱

你我不同道⑲

白話的な副詞としては以下のものがあげられる。

必得大王親往(74)

永得保全(77)

只得脱下外套(53)(58)

休得(59)

幾乎淹死(5)

將近成功(43)

このほか、介詞や極めて白話的な語彙もいくつか以下に示しておく。

<介詞>

狐狸已往東方去矣(67)

狐始從草堆走出(67)

將手匿關(74)

其子將母耳咬去(68)

將羊按律治罪(63)

將所耕之田盡行掘過找尋(64)

幾將村鼠攫去(8)

幾將行人外套吹落(53)

向母羊身上爪去(57)

在京師過活(8)

小鼠在旁玩跳(46)

<白話的語彙>

還了得(66), 將就(66), 出差(63), 方便(67), 育得(48), 養得(4), 下種子(2), 放心(61), 衆小官(20), 高興(39), 得罪(1), 玩意(45), 玩耍(2), 摸弄(45), 不值甚麼了(62)

確かに欧米人の中国語学習用テキストとして編集された『意拾喻言』であるが、このように、内容を中国風にアレンジし、また非常に平易な白話に近い文体を採用したことにより、中国人、中国社会にも受け入れられた²³⁾とすることができる。また、そのことが、宣教師達の中国伝教の方針と符合することで、彼らに評価され、彼らによって様々な形で引用、紹介、出版され²³⁾広がっていったのである。

このトームのイソップ翻訳の方法、態度、つまりその「翻訳観」は実は、モリソンの「翻訳観」を受け継いだものだと言うことができる。単なる「語彙の置き換え」でなく、あくまでも「中国人の思考」を念頭に置いた、いわば「相手方の文明に身を置く」（柳父1986）という「意識的な中国文化への自己同化」という立場である。トームは本書の中国語「叙」の中で「如先儒馬禮遜所作華英字典，固屬最要之書，然而僅通字義而已」と述べているが、これはモリソンの字典が無益であると批判する言葉ではなく、むしろモリソンの自己評価、「翻訳観」を代弁したものと見なければならぬだろう。なぜなら、モリソン自身が自分の字典に対してこう述べているからである。

読者は、翻訳に際して使える正確なことばを、この字典に期待してはならない。ここで提供できるのは、しかるべき文句を取出すてがかりとなるようなことばの意味なのである。また、中国語の詩的な意味が正確にここで得られると期待してはならない。ことばの移り変わる意味のすべてとか、よく使われる漢文古典の比喻の意味などもここに求めてはならない。そういうものは、これまでヨーロッパ人が中国語を学んできたのよりもずっと多くの、さまざまな才能の人たちの努力にまたなければならないのだ。（柳父1986, 113p）

この字典を作った著者の目的は、西洋人に中国語を伝えるということであった。ところで、いったい文から離れた単語の定義だけで、ことばの意味を伝えることができるだろうか。……辞書にあるのは、文から切離された単語の定義だけでなのである。（同上書, 117p）

ここでモリソンが述べていることは重要である。「辞書」の中にあるのは言語ではなく、柳父章氏の言葉を援用すれば、「翻訳」における「正確な equa- lity」はそもそも期待できないものであるという基本的な態度が表明されている。

「言語」とは「人の表現」の一つであり、「対象—認識—表現」という過程的な構造を持っている。その成立の基盤として「話者（表現者）」すなわち「人間」の存在は不可欠である。このような言語観に立った時、ある言語の「語

彙」は、その言語を使用する民族、種族の、ある対象に対しての共通の「認識の集合」と考えられる。言い換えれば、言語はその使用する民族や種族の「歴史」「思惟」といった「文化」を反映したものである。「文から切離された単語の定義だけで、ことばの意味を伝えることはできない」「辞書に言語はない」というのは、まさにそのような言語観に基づく「文化移入」「文化受容」の態度であると言うことができる。従って、「翻訳」に求められるものも、いわゆる「語彙の equality」ではなく、目に見えない「認識(あるいは価値)の equality」ということになり、ここで「言語の翻訳」とは、「文化の翻訳」ということになるわけである。このような、モリソンの翻訳観をトームはイソップの翻訳において具現化させてみせたのであり、トームはまさに「モリソン翻訳観の正統な後継者」と言うことができるのである。

4. 『意拾秘傳』

ところで、『意拾喩言』の英文序には次のように書かれてある。

When first published in Canton 1837—38 their reception by the Chinese was extremely flattering.

(最初に1837—38で公にされた時、中国人から極めて大きな歓迎をうけた)

また、『東西洋考毎月統記傳』²⁴⁾の戊戌五年(1838)9月の「新聞」欄「廣州府」の記事の2つめに次のような記載があり、その後、4つの寓話が紹介されている²⁵⁾。

省城某人氏文風甚盛、爲翰墨詩書之名儒、將希臘國古賢人之比喻、翻語譯華言、已撰二卷。正撰者稱爲意拾秘、周貞定王年間興也。聰明英敏過人、風流靈巧、名聲揚及四海。異王風聞、召之常侍左右、快論微言國政人物、如此甚邀之恩。只恐直言觸耳、故擇比喻、致力勸世衆愚遷智成人也。因讀者未看其喩余取最要者而言之。

4つの寓話は、『意拾喩言』で言えば No. 1 の「豺烹羊」、No. 3 の「獅熊爭食」、No. 12 の「狼受犬騙」、No. 22 の「鷹猫猪同居」であるが、『意拾喩言』

とは若干の語句の異同が見られる（ただし、これから述べる『意拾秘傳』とはほぼ同じ）。

さらに、『Chinese Repository』(Vol. VII, Oct. 1838)でも、「Aesop's fables in Chinese; Boletim Official do governo de Macao.」²⁶⁾という記事が掲載されている。

つまり、『意拾諭言』が出版される以前に、その初版とも言うべき『意拾秘』とかいうものがすでに存在していたということになる。

ダグラス『大英博物館所蔵漢籍目録』(坂出祥伸解説, 科学書院, 1987)には、イソップの項と、ロバート・トームの項に以下に示すように『意拾秘傳』なる書名が記されている²⁷⁾。

Aesop, THE PHRYGIAN.

意拾秘傳 E-shih-pe chuen. "Aesop's Fables."

Translated into Chinese by Lo-pih Tan. 4 keuen. 1838. 8° (1p)

羅伯聃 Lo-pih Tan [i. e. Robert Thom]

See Aesop, THE PHRYGIAN. 意拾秘傳 E shihpe chuen.

"Aesop's Fables." Translated into Chinese by Lo-pih Tan, &c. (143p)

ここで『意拾秘傳』の標音が「E-shih-pe chuen」あるいは「E shihpe chuen」となっていることに注意が必要かもしれない。実は筆者もこれまで『意拾秘傳』を『意拾／秘傳』と読んでいたのであるが、これは『意拾秘／傳』と読むべきだったのだ。「秘」は広東音つまり、モリソンの標音では「pe」であり、「意拾秘」は「Aesop」の音訳なのである。いずれにせよ、この『意拾秘傳』こそが『東西洋考毎月統記傳』で言うところの『意拾秘』、あるいは、トームが序で述べ、『Chinese Repository』で紹介された「Aesop's fables in Chinese」、つまり『意拾諭言』の初版本である可能性が非常に高い。ただ、これまでこの『意拾秘傳』については管見の及ぶ範囲では未だ言及されていないようである。

今回、大英図書館よりマイクロフィルムを入手できたので、これについて以下述べておきたい。

4-1. 『意拾喩言』との比較

表紙に『意拾秘傳』とあり、全4巻、12cm×21cm、縦書き線装本。

各巻の構成は以下の通りである。

巻一(ただし「巻一」という表記はない) 英文目次欠 本文4葉、9行22字

巻二(以下は表紙に「巻～」の表記あり) 英文目次 本文9葉、9行22字
最後のページに「道光戊戌蒲月吉旦 鶯吟羅伯聃述」とあり。

巻三 英文目次 本文12葉(最初の1葉欠) 9行20字 最後に「鶯吟羅伯聃」とあり。

巻四 英文目次 本文11葉 9行20字

なお、巻一・二と巻三・四では活字が異なる。

巻二と巻三に見える「鶯吟羅伯聃」であるが、「羅伯聃」はトームの中国名でよく知られている。問題は「鶯吟」である。本来の意味としては「鶯のこえ」(たとえば李白の詩に「魚躍青池滿、鶯吟綠樹低」とある)ということであるが、それでは通じない。全くの推測に過ぎないが、ここではトームが文人を気取って「イギリス人(英人)」の音訳として用いたと考えておきたい。

また、巻四の英文目次の次に、手書きによる「羅伯聃自叙」と、『意拾秘傳小引』がそれぞれ1ページ付けられている。自叙において、『意拾喩言』の「華英字典」が「漢洋字典」に、また、『意拾喩言』では「知名不具」と名前を伏せているのに対し、『意拾秘傳』では、「羅伯聃自叙」と本名を記している以外、語句の異同は認められない。

収められている寓話は全部で77話で、それぞれ『意拾喩言』とは以下のように対応している。

巻一……10話(『意拾喩言』の1-10に対応)

巻二……21話(12-31)²⁸⁾

巻三……24話(33-56)

巻四……25話(72-79、ただし58はなし)

すなわち『意拾諭言』には、11の「獅蚊比藝」、32の「眇鹿失計」、58の「鳥悟靠魚」、80の「老鱗皆亡」、81の「直神見像」が加わったことになる。

また中文タイトルと英文タイトルの違いも若干認められる。

なお、各話の語句の異同は後日、校勘表の形で提示することにする。

結局、1840年出版の『意拾諭言』は、『意拾秘傳』の改訂増補版であることが確かめられたわけであるが、この『意拾秘傳』の発行年、発行場所については、なお未確定な部分が残されている。

トーム自身が「廣東で1837—1838に出版した」と述べているから間違いはないのだろうが、気になるのは『東西洋考毎月統記傳』と『Chinese Repository』の記述である。

『東西洋考毎月統記傳』では、出版場所については明記されていないが、廣州府の記事であるから、出版場所は広州と考えるのが自然である。一方『Chinese Repository』では、その情報源が Macao となっている。また、『東西洋考毎月統記傳』では2巻となっているのに対し、『Chinese Repository』では3巻と紹介されており、実際に大英図書館に所蔵されているのは4巻である。

ここで『Chinese Repository』(Vol. VII, Oct. 1838)の紹介記事をもう少し詳しく見てみよう。

The fables before us, now for the first time in a Chinese costume, have been selected from Sir Roger L'Estrange's collection, and are contained in three little octavo tracts, the first in seven, the second in seventeen, and the third in twenty-three pages.

ここでは、中国の衣装を纏って現れたイソップの原本は、Roger L'Estrange²⁹⁾のものであること、そして、中国語版は3巻の小さな8折判であること、第1巻が7ページ、第2巻が17ページ、第3巻が23ページということが述べられている。

判型については、大英図書館蔵本と一致する。ページ数も、本文のみ（英文目次と署名のみのページや白紙のページは除外）の計算と考えると、第3巻だ

けは1葉欠と見て2ページをプラスすれば、これもびったりと一致する。従って、『Chinese Repository』で紹介する本と、大英図書館蔵本の第1巻から第3巻までは同じものと考えられる。また、第3巻について述べた部分で、それが24の話を取めている (it contains twenty-four fables) という点も、大英本に一致する⁸⁰⁾。しかし、問題は次の記述である。

They have made their appearance, one after another, at intervals of about a month, are well liked by the Chinese.

つまり、それぞれ大体1ヶ月の間隔で順々に発行されたというのである。

この記事が掲載されたのは1838年10月であるが、『Chinese Repository』で紹介される本は、紹介する号と発行年月はそれほど開きがないのが普通である。また『東西洋考毎月統記傳』の記事は9月であり、両者が同じものを指すとすれば、9月までに2巻が発行されたということになり、第1巻から第3巻までの発行時期は、8月から10月、少し早めても7月から9月であって、第4巻は10月以降に発行されたと考えられる。いずれにせよ、1837年まで下げるのにはどうしても無理が生ずるのである。考えられる可能性としては、ただ一つ、『Chinese Repository』で紹介された本と、『東西洋考毎月統記傳』で紹介した本や、大英図書館蔵本とは別の版本ということである。訳者自身が1837年と言う以上は、その可能性が強いかも知れない。大英図書館蔵本では、トームの実名(中国名)が記されているが、『Chinese Repository』では更に以下のように「Munmooy seenshang」という『意拾喩言』に見える名前が登場しているからである。

Munmooy seenshang, 'the translator', certainly deserves much credit for the very easy style into which he has moulded the quaint English of Sir Roger.

つまり、広東版は1837年から1838年の9月までに2巻が発行されて、9月以降に更に残りの2巻が出版された。そしてそれは恐らくは注23)にあるように、「在華實用知識傳播會」の出版物として発行された。これとは別に、マカオでも「Munmooy seenshang」の名で『意拾喩言』にほぼ近い形のものが出版

されたということが考えられる⁸¹⁾のであるが、今後の調査を待つことにしたい。

5. 「意拾」から「伊娑菩」へ—日本に伝わった『意拾喩言』

さて、『意拾喩言』は日本へも伝わっている。ただし、『意拾喩言』ではなく、『伊娑菩喩言』とその名を変えてである。

たとえば新村1973では次のようにある。

ともかくも此の漢訳本『意拾喩言』の系統本は、幕末嘉永安政年間に至つて、日本に伝來した。駿河田中藩の増田貢その号を岳陽といつた人の写した『伊娑菩喩言』と題する写本を岡崎桂一郎博士の蔵本によつて大正初年に見たことがあるが、それには長州の宍戸璣（山県半蔵、号世衡）が安政三年丙辰陽月に跋を加へたものと、又安政四年十一月二十日吉田松陰が再跋を施したものを書き加へてある。私はそれらの跋文のない普通の写本を蔵してをる。いずれにしても『意拾喩言』から出た同本である。宍戸の跋によると、『喩言七十三條、蓋し英人の訳する所にして上海施醫院の活字刷板に係る、其の地名を挙げ時世を説くや皆之を支那に仮る、是れ訳者の苦心する所なり、此の書未だ清船の售價を経ず、某氏の嘗て之を俄艦中に獲たる所と云ふ、……』(416p)

ここで触れられている新村蔵本写本『伊娑菩喩言』は、現在、新村出記念財団重山文庫に収められているが、それにも、新村博士の次のような書き込みが見られる。

上海施醫院活字版ノ『伊娑菩喩言』、安政ノ初年頃俄船ヨリ得テ宍戸璣安政三年（丙辰）之ヲ写ス、翌年（丁巳）吉田松陰松可村塾ニ於テ門下ノ岡部生ヲシメ写サシメ、之ニ跋ス

なお、重山文庫には、「伊娑菩喩言叙」（写本2葉）が収められていて、それは、新村博士が大正初年に見たという、宍戸と松陰の跋のある増田貢写本である。

新村1973では、この漢訳イソップの日本伝來を、嘉永六年即ち1853年頃と結

論づけているが、ここで問題になるのは、何故「意拾」でなくて「伊娑菩」であるかである。筆者は拙稿1994で、関西大学増田文庫蔵『漢訳批評伊蘇普物語——名伊娑菩喩言』(1898)について触れた時に次のように述べておいた。

つまり『意拾喩言』の改訂版とすることができるようであります。メドハーストなどの手が入った可能性もあるかも知れません。また、何よりも『意拾』と『伊蘇普』あるいは『伊娑菩』では表記が異なっております。後者は「入声」のないところの表記のように思われます。それは「広東」以外の場所であるように思われます。(18p)

これを解く鍵は『遐邇貫珍』にある。

広東で出版された『意拾喩言』は、その後、香港最初の華字月刊紙『遐邇貫珍』に連載される。『遐邇貫珍』の創刊号(1853年8月)に「喩言一則」の欄が設けられ、そこに以下のように「伊娑菩喩言」という言葉が登場するのである。

伊娑菩喩言

伊娑菩者、二千五百年前、記厘士國一奴僕也、背佗而貌醜惟具天資、國人憐其聰敏、爲人獻身、舉爲大臣、故設此譬喩以治其國、國人近日理性、尊之爲聖、後奉命至他國、他國之人妬其才、推墜危崖而死、其書傳于后世、如英吉利、俄羅斯佛蘭西、呂宋、西洋諸國。莫不譯以國語、用以啓蒙、要其易明而易記也、此後各號隨時附記一則。

これは最後の「此後各號隨時附記一則」を除いて、『意拾喩言』の「意拾喩言小引」に該当する部分であるが、『意拾喩言』との大きな違いは、「意拾」が「伊娑菩」に、また「天聰」が「天資」に置き換えられていることである。一方、『漢訳批評伊蘇普物語——名伊娑菩喩言』(もちろん重山文庫の「伊娑菩喩言叙」と、『伊娑菩喩言』でも同じ)でもこの文が最初に掲げられるが、『遐邇貫珍』と同じ様な書き換えがなされている。明らかに脱字と思われる1カ所以外に、ギリシャを「希臘」と表記している点が『遐邇貫珍』と異なっているが、「イソップ」を共に「伊娑菩」とすることは両者の関係の深さを疑わせるものである。事実、その後、『遐邇貫珍』に連載されたものと、『漢訳批評伊蘇

昔物語——名伊娑菩喩言』に収められたものを見比べていくと、『意拾喩言』との語句の異同が多くは一致している。つまり、日本に伝わった『伊娑菩喩言』は、この『遐邇貫珍』系統のものであるということである。ただ、『遐邇貫珍』第3号(1853)に掲載された「ライオンと虫と蜘蛛」のように、『意拾喩言』、『伊娑菩喩言』のどちらにも収められていないものもある。

『遐邇貫珍』は周知の通り、香港「英華書院」から刊行されたものであるが、その最初の編集者は上海に滞在していたメドハーストである。また、宍戸の跋に見える「上海施医院の活字刷版」というのは、拙稿1996で述べたように、恐らく「上海施医院＝山東路医院＝仁濟医院」³²⁾の隣にあった「墨海書館」印刷ということである。「墨海書館」とはまさにメドハーストの手にかかるものである。『遐邇貫珍』—「墨海書館」—「上海」といづれも、メドハーストを中心に展開している。そして、ここで「Aesop」の音訳語の変更や『意拾喩言』の語句の若干の修正がなされた可能性は十分考えられる。「意拾」は広東語では [isep] であるが、上海語には広東語のような完全な「入声」はなくなっている。「Aesop」の「p」を表すのに「菩」という漢字を付け加えて「伊娑菩 [isopu]」としたというのが筆者の推測である³³⁾。すなわち、日本に伝わった『伊娑菩喩言』は『意拾喩言』のメドハーストによる改訂版であり、それは最初『遐邇貫珍』に連載の形をとって、後に墨海書館から1冊の本として安政3年(1856)前後に出版されたものと考えられる。また、この『伊娑菩喩言』は、これも拙稿1996で触れたように、高杉晋作らの文久二年(1862)上海行の際の購入書にも含まれている。

なお、増田文庫蔵『漢譯批評伊蘇昔物語——名伊娑菩喩言』(前田林外編纂、小野築山訓点)は明治31年(1898)の出版であるが、これには同治七年(1868)春三月の叙が付いている。『意拾喩言』の叙とほとんど同じであるが、『意拾喩言』では「漢文(＝中国語)」を学ぶ人のためとしたところを、本書では「英文」を学ぶ人のためとしている点が異なっている。しかし、増田写本や栗本鋤雲写本³⁴⁾を見る限り『意拾喩言』と同じ「漢文」を学ぶ人のためとなっており、これは前坊1989で言うように、トームの「蒙昧先生」に引かれた編纂者の

個人的意図によるものと考えられる。併せて『伊娑菩喻言』をサブタイトルにして、『伊蘇普』を冠せたのは、日本でのイソップの名称の定着度によるものであろう。このほか、本書ではモラルの部分を「評曰」で始めている点も特徴ではある。

ところで、日本ではもう一つ⁸⁵⁾、『意拾喻言』系統本が存在する。明治9年(1876)に出版された『漢譯伊蘇普譚』(阿部弘国訓点、大槻磐溪序)がそれであるが、これには扉に「英華書院原刻」とある。「英華書院」は先にも述べた『遐邇貫珍』を発行したところであり、これもその系統と考えられる。いわゆる『伊娑菩喻言』の香港版である。上海版つまり墨海書館版と同じく寓言73話を収めているが、ただ、その配列が異なっている。つまり香港版と上海版とは別の系統という可能性があるのである。

『伊娑菩喻言』が同治十三年(1874)時点で香港で出版されていたことは確かである。たとえば王韜によって発行された『循環日報』の同治十三年六月初五日(1874年7月18日)の「中華印務總局内文裕堂⁸⁶⁾」の「幼童初學各樣書籍發售」という広告には、『談天』『重學淺說』『西醫略論』『格物入門』といった科学書や『智環啓蒙』『英語集全』『華英通語⁸⁷⁾』といった学習書と並んで『伊娑菩喻言』の名が見えている。

『循環日報』はその印刷設備を英華書院から購入したが、その際にそれまで英華書院で発行していた書籍の版型も譲り受けたと思われる(恐らくはその中に『伊娑菩喻言』も含まれていたはずである)。それらを「文裕堂」の名で出版したというわけである。

オーストラリア国立大学図書館蔵の『伊娑菩喻言』はこの「文裕堂」版である。「光緒癸卯年(光緒二十九年=1903年—筆者)夏四次校讎、香港文裕堂活版」というのがそれであるが、阿部本と比較してみると、「叙」と「小引」が阿部本にはないのを除き(阿部本では大槻磐溪による「伊蘇普譯序」と阿部による「伊蘇普小傳」が付く)、両者はその配列も寓話の数も全く同じである。

戈1992では次のように言う。

英華書院(Anglo-Chinese College)於1843年由馬拉西亞的馬六甲遷至

香港、院長爲英國漢學家理雅各 (James Legge)。書院重新刻印了《意拾喻言》，改名爲《伊娑普喻言》。接着上海的一家教會創辦的醫院施醫院也刻印了這本書，從其中選了73則寓言，並附有原《鈺》及《小引》，出版年代不詳，估計當在1840年至1850年之間。(199p)

これは一つの推論であるが、Legge が「伊娑普」⁸⁸⁾と改名したとする根拠が示されていないこと、また73話を選んだのは上海版であるというが、先に述べたように、香港版(つまり英華書院版)でも恐らくは初めから73話であったことなどから、にわかには背けないところである。また『遐邇貫珍』に全く触れられていないことも気になる点である。もちろん、Legge も Medhurst と同じ程度に「英華書院」、『遐邇貫珍』との関係が深い人物であるから、戈の説には充分の可能性があるわけであるが、今後の調査に待ちたいと思う。

『意拾喻言』以降、中国では欧米人や、中国人によるかを問わず、多くの中国語訳イソップが登場してくる⁸⁹⁾。ただ多くはいずれも『意拾喻言』をその底本としており、『意拾喻言』の影響力の強さを物語っている。それらのことに関してはいずれ稿を改めて論ずることにして、ここでは最後に、筆者が見ることのできた欧米人の手になるいくつかの中国語訳イソップを以下に示しておく。なお、元になった L'Estrange 版イソップとの具体的な対照、「蒙昧先生」は存在したか、あるいは『意拾喻言』は「禁書」に処せられたか否かなど、今回紙幅の関係で述べられなかった問題も残されているが、これもまた後日に期することにした。

- (1) James Summers『A handbook of the Chinese language』(Oxford, 1853)
……Part II. Chinese chrestomathy にイソップが8則収められる。表音と漢字、それに英語の解釈付き。
- (2) 上海清心書院『小孩月報 (Child's Paper)』第2部 (New Series, Second
Volume: Shanghai, 1877—1878) ……毎号にイソップが掲載されている。
「兎と亀」が「蛇と亀」に変えられている話もある。なお、『小孩月報
(Child's Paper)』は1875年にアメリカ人宣教師 J. M. W. Farnham によっ
て創刊された児童向けの雑誌であるが、この初期のものは未見である。

- (3) St. Francis Xavier's School (Shanghai) 『A method of learning to read, write and speak English for the use of Chinese pupils Part II 英文捷訣』 (ZI-KA-WEI, Printed at the catholic mission press, Orphan Asylum of Tou-Sè-wè. 1883) ……中国人のための英語学習用テキスト⁴⁰⁾であるが、この第31章から第39章まで(147p)の各課に「読本」の教材としてイソップが1ないし2話ずつ、合計16話収められている。ページの左半分が英文、右半分が中国語という、英漢対照になっている。
- (4) 上海廣學會『孩訓諭説(A collection of useful fables)』(上海商務印書館, 1900) ……中西書院(Anglo-Chinese College, Shanghai)のRev. George R. Loehrによるものだが、102話の寓話のうちの多くはイソップである。

(1999.7.10脱稿)

【付記】

本稿は平成10年度関西大学在外研究の成果の一部である。期間中、ハーバード大学を中心として欧米の大学図書館等で貴重な資料を見ることができた。このような機会を与えて頂いたことに心から感謝する。また、今回の執筆に際しては、マイクロ等の資料請求で関西大学図書館のレファレンス・サービス課、さらに文学部の松浦章教授には特にお世話になった。併せて記して感謝の意を表しておきたい。なお、印刷の関係で引用した簡体字は全て繁体字(旧字体)に変更してある。

【主要参考文献】

『Chinese Repository』 Vol. VII, Oct. 1838.

『Chinese Repository』 Vol. VII, Dec. 1838.

『Chinese Repository』 Vol. IX, Aug. 1840.

『Chinese Repository』 Vol. XIII, Feb. 1844.

Hunt, Freeman 『The Marchants' magazine and commercial review』 第16巻第4号, New York, 1847. 4.

Bazin, Par M. 『Chine moderne ou description historique』 Paris, Firman didot frères, Éditeurs. 1853 (『L'univers. Histoire et description de tous les peuples. Chine moderne』 Part 1=Pauthier, Part II=Bazin, Par. M).

Summers, James 『A handbook of the Chinese language』 Oxford, 1863.

- Wylie, Alexander 『Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese』 Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1867.
- Inspectorate General of Customs 『The Catalogue of Publications of Protestant Missionaries in China』 Shanghai, 1876.
- Cordier, Henri. 『Essai d'une bibliographie des ouvrages publiés en Chine par les Européens, au XVII et au XVIII siècle』 Paris, 1883.
- 『Bibliotheca Sinica Vol. III』 Paris, 1906—1907.
- Allibone, S. Austin 『A critical dictionary of English literature and British and American authors』 Vol. III, Philadelphia, 1891.
- Britton, Roswell S. 『The Chinese periodical press 1800—1912』 Shanghai Kelly & Walsh, Limited. 1933.
- Boase, Frederic 『Modern English biography』 Vol. III, Frank Cass & Co. LTD, 1965.
- 『支那叢報』第8卷解説、丸善株式会社, 1942。
- 杉浦丘園『和蘭及外國關係圖書並物品目録』清文堂, 1922。
- 鹿田文一郎「スロース譯述「意拾噺言」について」『書史』第1冊, 1927. 2. 20。
- 鈴木券太郎「「意拾噺言」補遺」『書史』第2冊, 1927. 5. 20。
- 新村出「伊曾保物語の漢訳」(『明星』のうち『新村出全集』第七卷に収録, 1973)。
- 増田渉『西学東漸と中国事情』岩波書店, 1979。
- 柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房, 1986。
- ロバート・K・ダグラス編 坂出洋伸解説『大英博物館所蔵漢籍目録』科学書院, 1987。
- 『大英博物館所蔵漢籍目録・補遺篇』科学書院, 1987。
- 卓南生『中国近代新聞史成立史1815—1874』ベリかん社, 1990。
- 前坊洋「イソップ、東アジアへ」『近代日本研究6』慶應義塾福澤研究センター, 1989。
- 古屋昭弘「17世紀ドミニコ会士ヴァロと『官話文典』」『中国文学研究』22, 1996。
- 「明代知識人の言語生活—万暦年間を中心に—」『現代中国語学への視座—新シロジャー・言語編』東方書店, 1998。
- 内田慶市「イソップ東漸—宣教師の『文化の翻訳』の方法をめぐる—」『泊園』第33号, 1994。
- 「イソップの東漸」補遺—『上海施医院』その他』『關西大學中國文學會紀要』第17號, 1996。
- 「清国英語事始」『關西大學中國文學會紀要』第18號, 1997。
- 周作人『自己的園地』北新書局, 1927。
- 『中國報學史』商務印書館, 1931初版, 1932再版。
- 裴化行 (Bernard, R. P. Henri) 著, 王昌社訳『利瑪竇司鐸和當代中國社會』上海徐家

- 匯土山潤印書館, 1943。
- 裴化行 (Bernard, R. P. Henri) 著, 管震湖訳『利瑪竇神父傳』商務印書館, 1998。
- 方美賢『香港早期教育發展史』中國學社, 1975。
- 中國社會科學院近代史研究室翻譯室『近代來華外國人名辭典』中國社會科學出版社, 1984。
- 戈寶權「談利瑪竇著作中翻譯介紹的伊索寓言—明代中譯伊索寓言史話之一」『中國比較文學』第1期, 浙江文藝出版社, 1984. 10。
- 「羅伯聘編譯的《意拾噺言》及其他—清代中譯伊索寓言史話」『中國比較文學』總第14期, 上海外國教育出版社, 1992. 6。
- 方漢奇『中國近代報刊史』山西教育出版社, 1991。
- 雅洪托夫著, 唐作藩等選編『漢語史論集』北京大學出版社, 1986。
- 顧長聲『傳教士與近代中國』上海人民出版社, 1991。
- 熊月之『西學東漸與晚清社會』上海人民出版社, 1994。
- 張秀民, 韓琦『中國活字印刷史』中國書籍出版社, 1998。

註

- 1) 日本のイエズス会の場合も, 日本語教材として彼らが最初に訳したのは「ドチリナ・キリシタン」と「イソップ」であった。ローマ字による『ESOPNO FABVLAS』いわゆる「文祿舊譯伊曾保物語」は1593年に天草で出版された。「ドチリナ・キリシタン」もほぼ同時期(1591)である。一方, 中国語訳ドチリナ(『Catecismo de la Doctrina cristiana』)も1593年にドミニコ会の Juan Cobo (高母羨)によってマニラで出版されたという事実がある。Coboにはドチリナの他に、『明心寶鑑』(1591)『無極天主正教眞傳寶録』(1593)などの著作があるが, 日本の状況と考え合わせた場合, リッチヤトリゴ—以前に, イソップの中国語訳も Cobo などによって当時出版されていた可能性もないわけではない。今後の課題である。
- 2) これらの『意拾噺言』以前の明代以降の中国語訳イソップについては別に論考を準備している。
- 3) 『The Canton Press』は英国商人により, 1835年9月12日に広東で創刊された新聞で, 毎週土曜日に発行された。1839年6月1日号 (No. 195) までは広東で出版されていたが, アヘン戦争前夜の英国と中国の関係悪化に伴い, 澳門に移され, 1839年7月6日号 (No. 196) からは澳門で発行された。その後, 1844年3月30日号 (No. 443) をもって停刊。

Britton 1933 によれば, 魏源は『The Canton Register』や『The Canton Press』という英文タイトルを中国語に訳す際にそれぞれ『澳門雜錄』『澳門新聞錄』に置き換えたが, その理由は当時, 林則徐や魏源は外国人がそのようなものを広東で出版していたという事実を公にするのは不適当と考えたからだという。(同書33p)

ところでトームの最初の著作である『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』(1839)も『意拾諭言』も同じく「Printed at the Canton Press Office」となっている。しかし、Bazin 1853 によれば次のようにある。

1839. R. Thom. Lasting resentment of miss Wang-kiaou-lwan, a chinese tale, founded on fact. Canton, in-8.

1840. Aesop's fables, written in Chinese by the learned Mun-mooy, and compiled in their present form, with a free and literal translation, by his pupil Sloth(Rob. Thom). Macao, in-fol.

このように、一方は Canton で一方は Macao と記されているのである。

この点について、かつて鈴木寿太郎氏が以下のように触れられたことがある。

玉稿(鹿田文一郎1927「スロース譯述「意拾諭言」について」一筆者)中に示されたる「意拾諭言」の標題に依りて該書が廣東プレス・ヲフ井スにて印刷せられたることを看取するが、Chine Moderne (1853年出版)第二巻バゼン, M. Basin (Bazin)の誤りか一筆者)執筆の部「書史」中の1840年の項 [P. 670] に、トムの「意拾諭言」が Macao (澳門) にて刊行せられたるやうに記しあるが、事實該港にて刊行せられたものなるか。御示教を得ば幸とする所である。

(『意拾諭言』補遺)『書史第2冊』昭和2年5月20日, 16p)

Bazin のこの記述はおそらくはその刊行地あるいは「Canton Press Office」の置かれた場所を述べていると考えられる。『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』が出版された頃は「Canton Press Office」はまだ広東にあり、『意拾諭言』の頃にはすでに上記のように澳門に移っていたわけである。あるいは「序」が書かれた場所を言っているとも言える。事実、前者の序は「Canton, 25th December 1838」であり、後者は「Macao, 15th May 1840」となっている。

4) 『Chinese Repository』(Vol. IX 1840) の Bridgman の記述によれば「an odd misnomer」ということになる。

5) 『意拾諭言』の扉の次ページには次のような、献辞が掲げられている。

To those generous patrons by whose bounty the entire express of his Chinese education was defrayed, William Jardine Esquire, James Matheson Esquire, Henry Wright Esquire, of Canton, the following little work being the first-fruit of a long course of study by their very numble and often-obliged servant.

これは、トームはこの会社から、時折彼らのために通訳をする見返りとして、それによって彼の中国語学習の経費が全て賄われるほどの多くの報奨金を得ており、それに対する感謝の意を表したものである。『Chinese Repository』(Vol. IX, 1840) 参照。

また同じような献辞が『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』(1839) にも見られる。

6) この初代領事就任の年月については、問題がないわけではない。『近代來華外国人名辭典』(1981)では1843年10月とあり、『清季中外使領年表』(中華書局, 1985)では道光23年10月=1843年12月とある。

7) 前稿で和刻本『漢英通用雜話』についてその存在に疑問をさしはさんでいたが、『和蘭及外國關係圖書並物品目錄』(1921)の「和蘭及外國關係圖書追加目錄」に以下のようにある。

漢英通用雜話上卷 英・羅伯聃著 萬延元年九月 青井堂

この目錄は杉浦丘園(利擧)所蔵の圖書(約五万余)のうち、オランダおよび外国関係のものとの関係の物品を大正十年十月に府立京都図書館にて展示した時のものである(緒言)。従って、実際にこの本は存在していることになる。

8) 張秀民、韓琦1998によれば、「分合活字」の初期のものとして同じ「寧波華花聖經書房」から出た『耶穌教要理問答』(1849)があげられているが、トームのはそれより3年前である。

9) 本書の序文において Bridgman は次のように述べている。

The reading of Chinese books, —such as tracts, essay, &c.,—composed by foreigners, is a very questionable course. When the style is purely Chinese, all the phrase having been selected or formed by native masters, as in the case of Esop's Fables, it cannot be objected to.

ここは中国語のテキストの信頼性について述べているのだが、『意拾喻言』のように母国語者によって作られたものならばよいというわけである。つまり、『意拾喻言』はトーム一人で作られたのではなく、「蒙昧先生」の存在を暗示している。

10) たとえば、『Modern English Biography』(1965)では次のようにある。

THOM, David. b. Glasgow about 1795; minister of the Scotch ch. Rodney st. Liverpool and then of Bold st. chapel, Liverpool; author of The assurance of faith: or Calvinism identified with Universalism, 2 vols. 1828; Dialogues on universal salvation and topics connected therewith 1838, 3 ed. 1855; The three grand exhibitions of man's enmity to God 1845; The scripture doctrine of the atonement 1868; and other books. (923p)

11) David Thom の文書は次のように始まっている。

The Rev. David Thom begs leave to present to the Trustees of the British Museum, a copy of a posthumous work of his late brother, Robert Thom Esqr, Consul at Ningpo, China, entitled "The Chinese Speaker."

12) トームのこのような卓越した言語学者としての資質が、当時も高く評価、尊敬されていたことは、たとえば、中国語の文体等について優れた見解を示した Meadows がその書でトームに次のような献辞を捧げていることから窺える。

To Robert Thom, Esq., her Britannic Majesty's consul at Ning-po, these notes

are dedicated, as a testimonial of respect for his high character and talents, by his obliged and grateful friend.

(『Desultory notes on the government and people of China』1847)

- 13) この「particle」というのは、トームによれば、「之、乎、者、也、矣、焉、哉、七字能分者秀才也」で代表的に示されるいわゆる「虚字」の類である。また「複数」を表す「輩(吾輩)」や「曹(爾曹)」「等(伊等)」などもこの類に入れられる。
- 14) 「References and Explanations」に次のように説明されている。

The English in the Roman character, is a free translation from the accompanying Chinese.

The English in Italics, is a literal and verbatim translation for one Chinese character, on the Hamiltonian principle.

The Chinese sounds in the Roman character, give the Mandarin pronunciation of Nanking City—as fixed by the late Dr. Morrissions in his excellent Syllabic Dictionary.

The Chinese sounds in Italics, give the Vulgar pronunciation of Canton City, chiefly founded on the system of spelling adapted by Dr. Morrison, but altered so as to resemble as much as possible his mode of spelling the Mandarin.

- 15) 英文の序で次のように述べている。

This is the first time, we believe, that any work has been printed on Chinese wooden blocks, and European metal types—placed side by side. The experiment having succeeded—numerous works will now most probably be printed in the same way.

- 16) 1999年6月1日付けメール。

- 17) この「北帝」について、前坊1989では「そもそも「北帝」ということばは漢語辞書のうちに発見されぬ」(59p)と述べておられる。ただ、これは恐らく出典がある。『意拾喩言』よりは後に出版されたがメドハーストの『An inquiry into the proper mode of rendering the word god in translating the sacred scripture into the Chinese language』(Shanghae, 1848)に『廣博物志』を引いて次のように言う。

In the 26th sect. the ancient emperor 炎帝 Yen-te is said to be the present 北帝 Pih Te of the northern region and superintendent of all the Kwei Shins throughout the world. (57p)

『廣博物志』の該当の箇所には次のようにある。

炎慶甲者古之炎帝也今爲北太帝君天下鬼神之主(巻14—26)

つまり、「北帝(北太帝)」は「北方の帝」であるばかりでなく、全ての「鬼神」を統轄するものとして存在するというわけである。また「北方の帝」としての「北帝」は『職國策』などにも登場するし、「黒帝」の意味としても古くから使われている。

「北帝」が「全ての鬼神を統轄する」というのは他に例を知らないが、「Jupiter」が「神々の主」であるということを考えれば極めて的確な訳語と言える。

- 18) 『Chinese Repository』で次のように表現されている。

The fables before us, now for the first time in a Chinese costume, have been selected from Sir Roger L'Estrange's collection, (Vol. VII, Oct. 1838, 335p)

A portion of these fables has recently appeared in a Chinese dress, and has been well received; (Vol. VII, Dec. 1838, 403p)

- 19) This Style comes under the class of 雑録, being 文字之末 or lowest and easiest style of Chinese composition (By making himself master of this style, the Student will find little difficulty in understanding the various 小説 or popular novels of the day, and it may serve as a stepping stone to much higher literary attainments.).

- 20) Francisco Varo はスペインのドミニコ会の宣教師であるが、『Arte de la lengua mandarina (官話文典)』(1703)において「官話」の文体に3つのモード(口頭語としての文語、文語・口語の混交体、普通の口語)があることを述べている。これについては古屋昭弘1996, 1998に詳しい。

- 21) 「白話」と「文言」を分けるいくつかの「鑑定語」については、雅洪托夫の「七至十三世紀的漢語書面語和口語」(『漢語史論集』北京大学出版社, 1986所収)で示されているが、筆者の考えるところとほぼ一致している。ただ今回は時間の関係で全ての語の頻度数等の調査は間に合わなかった。後日、語彙表と共に提示する予定である。

- 22) トームは英文序で次のように述べている。

When first published in Canton 1837—38 their reception by the Chinese was extremely flattering. They had their run of the Public Courts and Offices—until the Mandarins—taking offence at seeing some of their evil customs so freely canvassed—ordered the work to be suppressed.

つまり、トームのイソップは官吏を含む中国人に大きな歓迎を受けたが、その後禁制になったというのである。この点について、周作人はこう述べている。

以前、明訳イソップのことについて述べた時、1840年に出版された『意拾蒙引(=意拾蒙言—筆者)』に触れたことがあるが、最近、英国の Jacobs の「イソップ小史」を読んで、この『蒙引』に関する一つの小さなエピソードを知った。彼の Morris が『Contemporary Review』第39巻で発表した文章を引くところによれば、『意拾蒙引』は出版されるとたちまち流行し、みな興味津々に語り合った。その後、一人の役人の知るところとなり、「これはまさに我々のことを批判しているにちがいない」ということで、すぐさまこれを禁書書目に入れるように命じたというのである。この話は、おそらく事実ではないように思われるが、すこぶる興味がある。『意拾蒙引』は中英合璧(=対照)の洋装の小冊子であり、教会などの付属機関の発行したものであ

るが、現在の「廣學會」の販売方法などから考えても、その販路はそれほど広いはずはない。従って、Paul Carus が『支那哲學』を進呈したのと同じように、もし著者自らが送り届けることでもしない限り、役人に知られることは容易ではなかったはずである。ましてや、役人達もこぞって『意拾蒙引』を愛読したとは、到底信じられない。西洋人はきまって、中国を「アラビアンナイト」の中の一角の場所としてとらえたりするものであって、時にはとんでもない見方をするのである。ただ、この話の最も重要な部分は『意拾蒙引』がかつて本当に禁書になったか否かということであるが、残念ながら現在では調べようもない。(周作人「再關於伊索」『自己的園地』1923.9初版, 1927.3十版, 北新書局, 198—199p)

周作人はこのように「禁書」については懐疑的であるが、トーム自身も述べているし(1881年に発表された Morris の文章は実はトームの序によっている)、当時の『澳門新聞紙』(1844年6月20日)にも同じような記述がある。

依瀛雜記原係士羅所譯轉之英吉利字, 今在本禮拜內, 印出爲中國字……………於一千八百三十七三十八兩年, 當此書初出之時, 中國人甚讚美之, 後又入之官府手內, 官府見其中所說之事多有刺他之惡規矩, 遂出令禁止之

もちろんこの記事は同日の『The Canton Press』のイソップ紹介記事を中国語に訳したものであるが、もし「禁書」が全くのでたらめであるならば、翻訳者(おそらくは林則徐や魏源の周囲のもの)はこうは書かなかったと思われる。「禁書」に関しては John Francis Davis『Chinese miscellanies: a collection of essays and notes.』(London, 1865)にも記載があるが、ここではこれ以上は触れないことにする。

なお、『澳門新聞紙』は方漢奇1991に以下のようにある。

爲了了解外國侵略者在華的動態, 林則徐在廣東禁煙備戰期間, 在他的幕僚魏源的協助下, 曾經派人從以上的外文報刊中, 選擇出一部分新聞和評論, 以供參考。這種外報的中譯本當時稱爲“澳門新聞紙”, 每週或每月抄報一次。(15p)

魏源の『海國圖志』(100巻本, 1852)の巻81—83の「表情備采」の「澳門月報」の記事の多くはこの『澳門新聞紙』から採られている。上記のイソップの記事はその「澳門月報一」に収められているが語句にかなりの異同が見られる。

- 23) 『東西洋考每月統記傳』を発行した「在華實用知識傳播會 (the Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China)」はトームの書を、彼の了解の下で、この協会の出版物として出版したことがあるという。

The publication has, with the kind permission of the proprietor, been placed upon the list of works of this Society. (『Chinese Repository』Vol. VII, Dec. 1838, 403p)

このことに関して、顧長聲1991も「在華實用知識傳播會」の活動を述べた部分で「把別人出的〈伊索喻言〉節譯本拿過來算是該會的出版物」と述べている。ただし、いずれも1838年の記述であり、後述の『意拾秘傳』のことを指している可能性が大で

ある。

なお、『意拾喩言』は、『Chinese Repository』(Vol. XIII, Feb. 1844)のウイリアムズの紹介記事によれば、その後、1843年に福建語と広東語の音注が附せられたものが、シンガポール(Singapore Mission Press)で出版されている。福建語はDyer, Stronachによって漳州音が、広東語はStronachにより潮州音が附されて、Part Iが福建語で40p, Part IIが広東語で37pである。福建語のものは東洋文庫モリソン文庫に収められており、それによると漢字はなくてローマ字表音だけであるが、広東語のものは未見である。ただし『Chinese Repository』の記事の中に、「毒蛇咬銼」のページが載せられており(102p)、縦書きで漢字の右側に音注が付けられている。また最後の「慎之」という2語が欠けている以外は『意拾喩言』との語句の異同は見られない。

- 24) 『東西洋考毎月統記傳』はドイツ人宣教師ギュツラフ(Gützlaff)によって道光癸巳(1833)年六月に広東で創刊された新聞である。その後、途中、甲午(1834)年五月以降の休刊を経て、道光乙未(1835)年正月から六月まで刊行後、再び休刊。道光丁酉年(1837)正月に復刊後、道光戊戌(1838)年まで刊行。停刊が戊戌の何月か確定できないが、少なくとも九月までは刊行されていた。なお、1837年以降は「在華實用知識傳播會(the Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China)」にその編集は委ねられ、発行地もシンガポールに移された。
- 25) 筆者は、拙稿1994において「1840年以前に『意拾喩言』はすでに作られていた可能性があるわけですが(あるいは「毎月統記傳」に連載されたのかも知れませんが)」と述べておいたが、どうやらこの推測はそれほどの外れではなかったようである。
- 26) これは澳門政府の公報であり、『Repository』の説明によると1838年9月5日に創刊されたとある。

The Boletim Official, the first No. of which appeared on the 5th of September, takes the place of the Macaista Imparcial and the Chronica de Macao, both which have ceased.

これに関して、戈公振の『中國報業史』では次のように言う。

The Boletim Official de Governo de Macao (譯意澳門政府公報) 發刊於1939年1月9日。自第2期起, 易名 Gazette de Macao. (84p)

この發刊年はたぶん戈の誤りであろう。

- 27) ダグラスの「補遺篇」にも次のように見える。

E shih pe chuen. "Tales of E Shih pe." [Nine fables of Aesop translated into Chinese by Robt. Thom.] Presented by the Rev. David Thom. Nos. 1-4. [Canton?], 1837-1839. 8°.

4巻で、David Thomからの寄贈によることも、版型も、今回入手した『意拾喩傳』に一致する。ただ、「Nine fables」というのがよくわからない。実際は9話だけ

ではない。あるいは「Nice fables」の誤記かも知れない。また出版年が1837—1839になっているのも気にかかることである。

28) 12—31は、計算では全部で20話にしかないが、すでに前述の通り、31が重複しているから21話ということになる。

29) Roger L'Estrange (1616—1704) のイソップ英訳本初版は次のものである。

『Fables of Aesop and other eminent mythologists: with morals and reflexions』
(London: Printed for R. Sare, T. Sawbridge, B. Took, M. Gillyflower, A. & J. Churchil, and J. Hindmarsh, 1692, 480p)

なお第2版は1696年に出版された。

30) ただ実のところ、記事のこの部分には少し疑問もある。

His last number is decidedly superior to its two predecessors; it contains twenty-four fables; the first is, the man and his wooden god; the second is, the wagoner and Hercules.

24話収められていて、最初が「the man and his wooden god」というのは大英本に同じなのであるが、2番目とされる「the wagoner and Hercules」は、大英本では第3巻の最後に置かれているのである。ただし、これを『Chinese Repository』の記事の誤りと考え、その後の「in the last, for example, Buddha is made—and without much violence—to act the part of Hercules.」だけを見た場合、辻褄は合う。ついでに言えば、このヘラクレスを仏陀に演じさせたことについて、前坊1989では「やや奇抜の感をまぬかれぬ」と述べるが、この記事の執筆者は「それほどの違和感もなく」むしろ「優れた訳」と見なしている。

31) マカオで出版された可能性を残す、もう一つの気になることがある。それは、手書きの「叙」に見える「漢洋字典」という言葉である。モリソンの字典を述べた箇所であるが、『意拾諭言』でも、その後の『伊娑善諭言』でも、「華英字典」あるいは「英華字典」とあるところであるが、何故か「漢洋」が使われている。当時の中国語では「西洋」「洋」はポルトガルを指すことはよく知られている。たとえば、ゴンサルベスのポルトガル—チャイニーズ字典は「漢洋合字彙」という漢字タイトルが付く。「漢洋字典」としたのは、ポルトガル—マカオを意識したものであるかも知れない。

なお、David Thom の先に紹介した文書にも以下のようにある。

“Esop’s Fables translated into Chinese.” This like the former published under the pseudonyme of “Sloth.” There have been two editions of this work. The former published 1838, contains the bare text. Its appearance created a great sensation at Canton. The latter is a beautiful work, published 1840. It has preface note translation, pronunciation, &c. &c.

David Thom も『意拾諭言』の最初の版は1838年に出版されたと述べている。従って、1837年から1838年というのはやはり問題がある。

また大英本には David Thom による書き込みがあって、それによると、第3巻と第4巻は1840年2月に David Thom によって大英に寄贈され、Robert Thom によって1839年に翻訳されたとある。一方、第1巻と第2巻には1839年5月に寄贈とある。いずれにせよ、1837年に出た可能性は非常に少ないのである。

- 32) 「施醫院」についてはその後の調べで、Medhurst を始めとして、以下のように数種の英華字典に Hospital の訳語として使われていることがわかった。つまり「一般名詞」であることが明らかになったわけである。

Medhurst 『English and Chinese dictionary』(Shanghai, 1847)

Hospital 普濟院, 施醫院, 醫館, 醫局, 濟病院
a hospital for lepers, 病院
hospital for the blind, 瞽目院
hospital for the aged, 老人院, 養老院
hospital for the destitue, 棲流局
a foundling hospital, 育嬰堂 (I—680—681)

Doolittle 『A vocabulary and handbook of the Chinese language Romanized in the Mandarin dialect』(Fuochow, 1872)

Hospital; for the sick, 醫館, 施醫院, 濟病院 (Part I—240p)
Hospital or alms-house for the poor; 普濟院
for the destitue; 棲流局
for the blind; 瞽目院
for the aged; 養老院
for the foundling; 育嬰堂

このように Doolittle は他の Hospital に関する語彙もほぼ Medhurst を踏襲していることがわかる。

Baller 『An analytical Chinese-English dictionary』(1900)

Shih 施醫院 or 醫館 a hospital

MacGillivray 『英華成語合璧字集』(1930)

shih-i-yuan 施醫院 a charity hospital

面白いことに、この辞書は Stent を元にしてはいるはずだが、肝心の Stent にはない。

なお、「病院」は Hillier 『English-Chinese Pocket Dictionary of Peking colloquial』(1910) に見える。

また王翰の『瀛壖雜誌』(1875) にははっきりと「施醫院」は「仁濟醫院」であると示されている。

施醫院即今仁濟醫館也, 興墨海毗連, 專治華人疾病, 主其事者, 爲西醫淮頡稱刀圭精手, 西人於醫學最嚴, 必先於其國中考證無訛, 然後出試其僞, 懼以疏庸殺人也, …

……（巻六・12）

この「仁濟醫院」からは合信氏の『西医略論』（1857）、『婦嬰新説』（1858）、『内科新説』（1858）が発行されているが、印刷はあくまでも墨海書館であったはずである。

なお、余談であるが、宮永孝『高杉晋作の上海報告』（新人物往来社1995、3・10）では、高杉等が訪れたミアヘッドの場所を「城内」とする。しかし、これは恐らく誤りであって、常居する所は、城外の教會と病院であったと思われる。高杉の日記の個所はそう読むべきであろう。この点、さすがに増田1979の読みは正しい。「高杉や五代や中牟田がキリスト教会堂に常居する慕維廉を訪ねたのは……」とあり、「常居する所に訪ねた」と読んでいる。（増田1979、30p）

- 33) ただ前述の「意拾秘」との関係はなお解決されていない。
- 34) いま前坊1989に示された写真による。
- 35) 鈴木1927によれば村山徳淳訓點による「訓譯伊娑善諭言」もあるというが筆者は未見。
- 36) この「文裕堂」とは『循環日報』内の書籍の編集、印刷、販売を行う機関であったと思われる。たとえば、胡禮垣撰『新政論議』（1895）は「香港文裕堂」の出版である。卓南生1990によると『循環日報』の創刊は、同治十二年癸酉十二月十八日（1874年2月4日）であるが、前身の「中華印務総局」のその他の営業活動は引き続き行われていたという。その営業内容は卓によれば以下のものである。
- ① 中華印務総局は引続き顧客のために中文・英文の書籍、広告、海外新聞、各種の契約・文書などの印刷を行っていた（初期の『循環日報』にはほとんど毎日その関係の広告が掲載されている）。
 - ② 書籍、辞書、洗髪料、強壯剤など各種の丸薬・飲み薬などの販売。
 - ③ 大、中、小各種類の鉛活字の販売。（249—250p）
- おそらくこの3つの業務が「文裕堂」によって行われていたものと考えられる。
- なお、この個所の図には「各種書籍及各様薬水出賣」の欄（同治13年正月初九日）があり、そこにも『伊娑善諭言』などが挙げられている。
- 37) 『華英通語』は日本で福沢諭吉によって『増訂華英通語』として1860年に翻刻されたが、原書が如何なるものか、著者と言われる「子卿」が如何なる人物かはいまだ解明されていない。実は、これには中国で出版された版本が存在する。ハーバード大学燕京図書館蔵であるが、それによると「西營盤恆茂藏板」で、著者は「子芳」となっており、序文も「何棠庭」ではない。「西營盤」は香港の英華書院近くの地名であるが、中華印務総局の出版物としてその名があげられているところから考えると、原書の「華英通語」は恐らくは英華書院で発行されたものである可能性が高い。これも今後の大きな課題である。
- 38) ここで又は「伊娑善諭言」と言っているが、「伊蘇普」か「伊娑善」の誤りであろう

う。「伊娑普」というのはこれまで見たことがない。

- 39) 方言訳イソップも註23)で触れた福建語、広東語以外に、廈門語、上海語のものも出版されている。廈門語のものは筆者が見たもの(1885年、1893年)はいずれもローマ字のみである。上海語のイソップについては『Catalogue of publications by Protestant Missionaries in China』(1876)や Wylie1867 に Cabniss によるものが示されている。1857年出版の出版で、Crawford による上海標音文字によるという。
- 40) このようにイソップが中国人の英語学習用に使われた例としては、以下の記述にも見られる。

西元1864年1月、韋確士 (E. J. R. Willcocks) 從英國到港任中央書院英文教員，於西元1865年，將英文科變爲必修科，第一班 (Class 1) 的翻譯科，要求學生將伊索寓言及孟子翻譯爲英文。

(方美賢『香港早期教育發展史』26p 中國學社 民國64年3月)